

【保育実践論文(ソニー幼児教育支援プログラム) 審査講評】
2020年度 審査委員特別賞
企業主導型保育所 保育園 にじのおうち

“一人一人に応じて”を大切にした保育を通して、0、1、2歳児の子どもたちの「なんだろう」「おもしろそう」に向き合っている姿を援助していくことが、「科学する心を育てる」と考え、保育の在り方や環境について、熱心に研究を深められました。

子どもが、日常のごく身近なものとの関わりの中で小さな気づきや発見をしたり、驚いたり不思議に思って繰り返し試したりする姿を丁寧に記録しています。

また、子どもが興味・関心をもったことに継続的に関わる姿を保育者がゆっくりと時間をかけながら見守り、その中で一人一人の変容の姿を的確に捉えて心が動く環境づくりや援助に努められていることが分かります。また、言葉ではなく子どもの表情や動作などの瞬間を捉えた写真とそこから推測する心の動きの記述などからも、子どもの生き生きとした姿がよく伝わってきました。

0、1、2歳児の子どもにとっての「科学する心」を「“おもしろい”みつけた」が始まりであると捉えている点に独自性があり、様々な場面で「“おもしろい”が見つかる」「“おもしろい”が倍增」「“おもしろい”が広がる」「またいつか出会う“おもしろい”につながる」など、子どもの具体的な姿を通して主題に迫る読み取りをされています。

子どもにとって“園”というよりは、“おうち”のような場となるよう、全職員が同じ思いで保育に当たることを第一とし、子ども一人一人の願いや育ちを共有して、さらに寄り添った環境づくりや保育者の援助となるように、職員全体での研修を重ねていることも分かりました。

この年齢だからこそ出てくる発想や行動など一人一人の子どもの心の動きを捉えた記録はまさに「科学する心」の芽生えは乳児期からであることを裏付けるもので、乳児期における「科学する心」についての学術研究の視点からも貴重な実践論文であり、他園の参考にもなることが高く評価されました。